

空からきた子

斎藤田鶴子・作

高橋宏幸・絵



●この本の文をかいた人 斎藤田鶴子（さいとう たずこ）



1934年、神奈川県に生まれる。早稲田大学卒業。
在学中、早大童話会で児童文学をまなぶ。
出版社、広告代理店につとめたのちに、有志と
児童文学研究グループ「湘南たんぽぽの会」を
つくり、雑誌「たんぽぽ」を発行。二児あり。
日本児童文学者協会会員。
主な作品に、「ちごんぼ峠」（日本童話会賞）
「おばあちゃんのむかし話」シリーズがある。

●この本の絵をかいた人 高橋宏幸（たかはし ひろゆき）



1923年、秋田県に生まれる。
児童図書の編集に長年たずさわり、のち絵本作
家となる。絵本実作指導でも活躍。児文協会員。
著書に、「チロヌップのきつね」「まぼろしの
大しか」「しろくろくま」「かばのこブーブ」
「ちいさなたんぽぽさん」「八郎太」「そらにの
ぼったかさや」「ぞうくんのみつけたしごと」
「まいごのゴンベ」ほかがある。

空からきた子 〈あたらしい創作童話〉 11

発行 1979年11月10日 第1刷発行
1980年10月15日 第4刷発行

文 斎藤田鶴子

絵 高橋宏幸

発行者 森山甲雄

印刷 三美印刷

製本 河上製本

発行所 岩崎書店

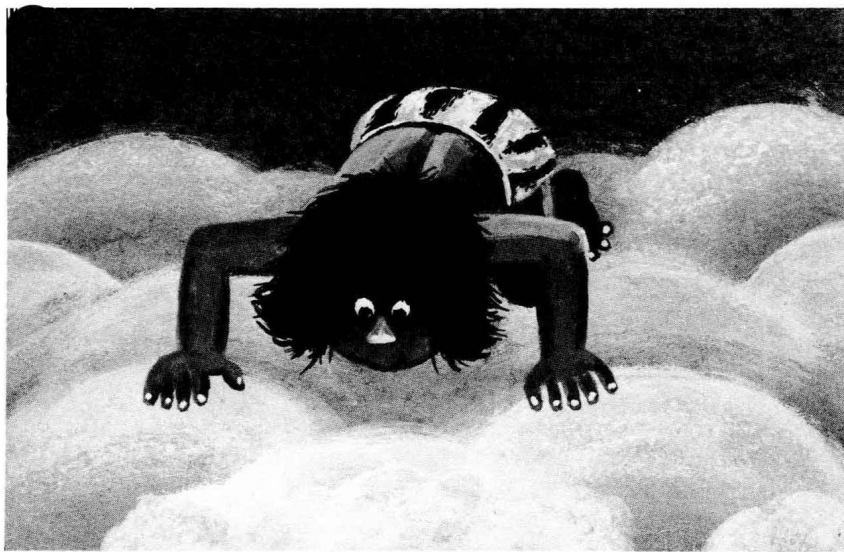
東京都文京区水道1の9の2 〒112

☎03-812-1563 振替（東京）7-96822

© Tazuko Saito & Hiroyuki Takahashi, 1979

8393-751179-0360 NDC 931

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします



空からきた子

斎藤田鶴子・文 高橋宏幸・絵



岩崎書店

1 カレーだいすき

ひかるくんが、ただしくんにサヨナラをして 外そとにでると、ポツリポツリと、雨あめがふってきました。

「あつ、夕ゆふだちだ。おうちまで かけてかえろう」

ひかるくんは、きいろいやきゆうぼうを、しっかりと かぶりなおしました。

ゴロゴロ ゴロツ！

みようじんさまの森もりのほうで、かみなりが なりはじめました。

「ギャー、こわい」

まどから外そとをみていた やまざきさんちの きょうこちゃんが、あわてて くびをひっこめました。

ひかるくんも、かみなりは だいきらいです。

「それっ。フルスピードだ」



ひでくんちの かどをまがって、げんかんのドアを ぱっと あけました。

「おかあさん、ただいま」

ジャージャージャー。

おかあさんは、おりようりの まっさいちゅうです。

「おかあさん、こんやのごはん なあに」

「カレーよ。カレーと とうもろこしのスープ」

「え、カレー？ うれしいなあ」

ひかるくんは、パチッと テレビのスイッチをいれました。

ピカッ。

青^{あお}白^{しろ}い光^{ひかり}が、にわのほうに みえました。

「一^{いち}、二^に、三^{さん}、四^し」

とおかあさん。

ゴロゴロ、ゴロツ。



「だいぶちかいようね」

「ねえねえ、どうして かずなんか、かぞえたの」

ひかるくんが、テレビをみながら ききました。

「かみなりって、ピカッと光^{ひか}って、ゴロゴロっとなるでしょ。そのピカッとゴロゴロが はなれているときは、かみなりが、まだ遠^{とお}いところにいるから、あんしんなの。ね」

おかあさんも、ながしだいのほうをむいたまま、大^{おお}きなこえで いいました。

「じゃあ、きょうは どうなの」

ひかるくんは、ちよつと しんぱいになってきました。

「まだまだ へいきよ。ほんとうに近^{ちか}いときは、一^{いち}、二^に、三^{さん}なんか、かぞえるひまがないのよ。ピカッ、ゴロゴロ、ドーンなの」

「わあ、びっくり させないですよ。おかあさん」

「よわむしねえ。かみなりぐらいに びくびくして。ほら、くまゴロ

「が はじまるじゃないの。もうすこし、テレビでも みていらつし
やい」

「う、うん」

ひかるくんは、元氣げんきのない へんじをしました。いつも、むちゅうに
なつてみる「くまゴロー」のまんがが、こんやは、ちっとも おもしろ
くありません。

ピカッ！

まどの外そとが、また光ひかりました。

(いち、にい、さん……)

ひかるくんは、おもわず、口くちの中なかでかぞえました。

コロコロ、コロコロ。

「あれえ。いまのは、ちょっと ちいさいなあ。もしかしたら、子こども
のかみなりかもしれないや」

ぷーんと、カレーの いいにおいがしてきました。

ググーと おなかが、なりました。

ひかるくんは、ズボンの上うへから、ぎゅっと おなかをおさえました。

「ああ、もう がまんできないよ。おなかぺこぺこ」

「もうすぐよ。あと五分ごふんか十分じゅうふんね」

おかあさんが、トントン、トントンと、いそがしく ほうちわとょうの音をさせました。

ピカピカーア。

「いち、にい……」

ゴロツ、コロコロー。

「あつ、おかあさん、すぐそこだ」

ひかるくんが、ぴよこんと へんなかつこうで、とびあがりました。

「そうだよ。ここに、いるんだもの」

「え？」

「ピカッときて ゴロツ。ね、だから ここにいるってことさ」



ひかるくんは、きよろきよろと、へやの中なかを みまわしました。

「くすくす くす」

だれかが わらっているようです。

「あ、だれか いるな」

「ぼくだよ」

「ぼくって、だれよ。だれなのさあ」

「みりや わかるよ」

「だって どこにいるんだい」

「もっと、こっちへ おいでよ。まどのところへ きてみてよ」

ひかるくんは、いそいで まどのほうへ いってみました。

外そとはもう まっくら。

ピシャピシャ、ピシャピシャ。雨あめの音おとだけが きこえています。

「ここさ。ほら」

「え、どこ」

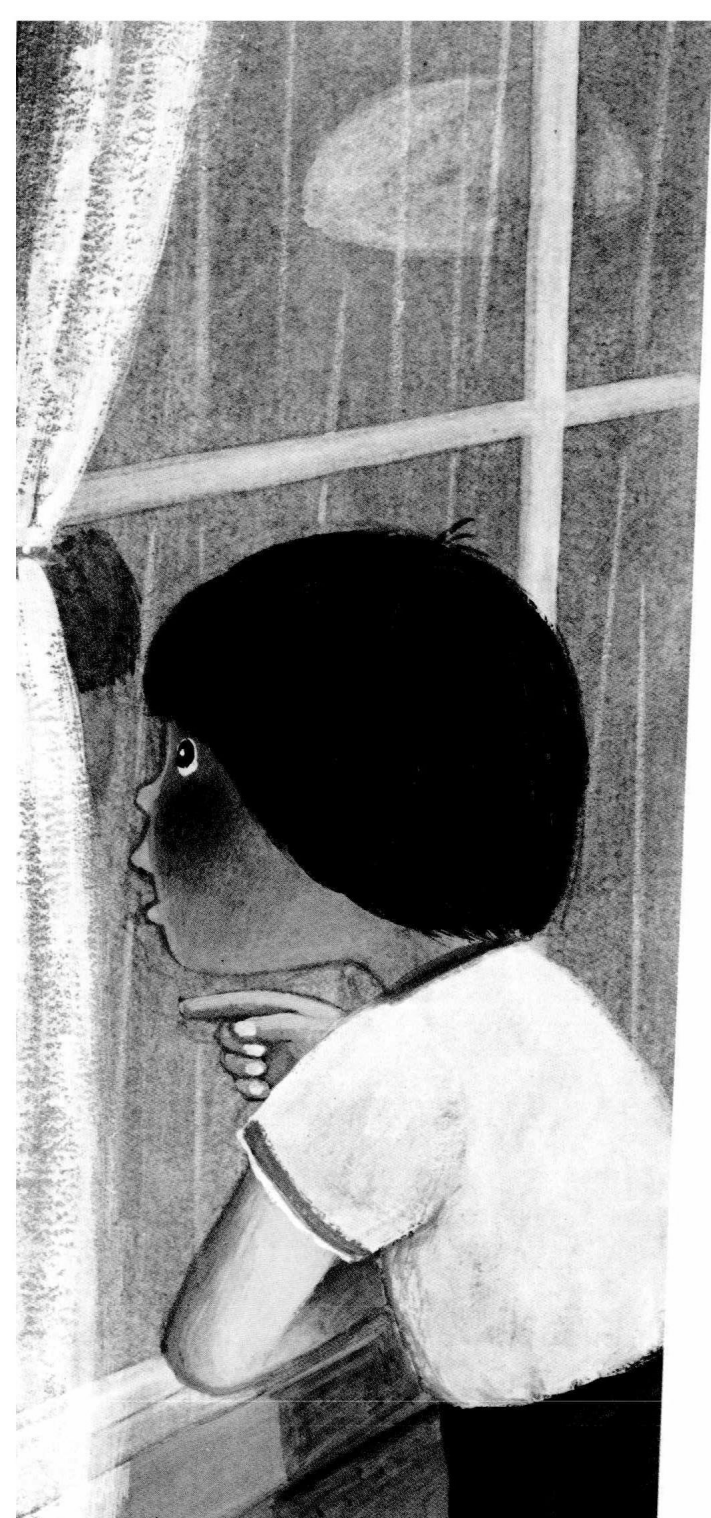
「それ、ぼくの目だまかとおもったよ」

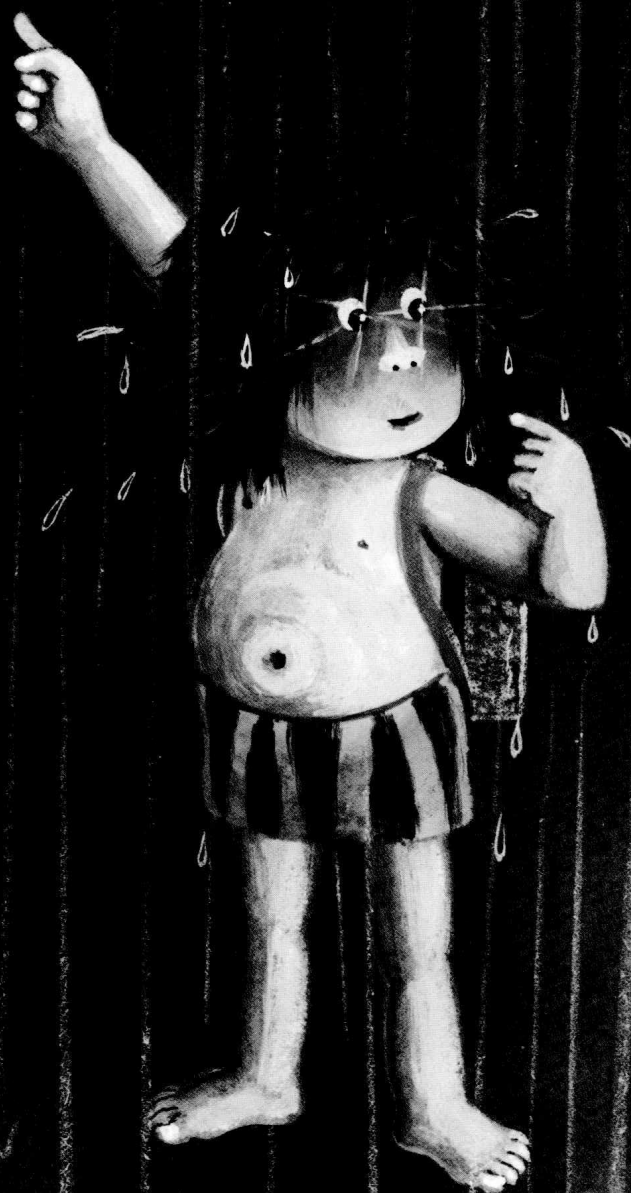
「ふん。人間の目だまが、こんなに ひかるもんか」

びしょぬれの男の子は、おこったように、あたまをふりました。ちぢれた かみの毛のさきつぽから、雨のしずくが、ピッピッと まよこにとびちりました。

「じゃあ、きみは 人間じゃあないっていうの」

ひかるくんは、すこし きみがわるくなってきました。





「ぼくは、ピカツときて　ゴロツ。ね、わかつたろ」

「なんだか、さつぱり　わかんないよ。きみのいうこと」

男の子は、にやりと　しました。

「じゃあ、はつきり　いうけどね。びっくり　しないでよ。ぼくはねえ、かみなりさ。かみなりの子ども」

「え、かみなり！　かみなりって、あの、ゴロゴロゴローってなる、あれかい」

「そうさ。さつき　きたばかりさ」

「ほんと。じゃあ、おっこつてきたんだね、空から」

「ちえつ。おっこつてなんかこないよ。おりてきたんだい」

かみなりの子は、おこつたように、赤くて小さい口を　とがらせました。

まんまるい青い目だが、ぐるぐると、いそがしく　うずをまいていきます。

「へーえ。じゃあ、どうして、ぼくんちなんかへ おりてきたのさあ」
こんどは、ひかるくんが、口をとがらせるばんでした。

「だって、だってさあー。いいにおいがしてきたから」

かみなりの子は、ちよつと はずかしそうに、わらいました。

（あれえ、きばなんか 生えてないや）

ひかるくんは、まんがの本でみた、かみなりのこわいかおと、いま
じぶんの前にいる、ちっちゃい男の子と くらべてみました。

「ぜんぜん ちがうじゃないか」

「え、なあに」

かみなりの子の まんまるい、青い目だが、ピカアーと、あかるく
なりました。

「いいにおいつて……ぼくんちから？」

ひかるくんは、ちよつと かんがえてから、げらげら わらいだしま
した。